

沖縄歴史の散歩道

石碑を巡る③

琉球史研究家の上里隆史氏が沖縄の歴史文化の魅力を本誌上で連載しています。



金剛嶺碑(浦添市経塚)



金剛山碑と南無阿弥陀仏碑(国頭村奥間)

石碑には前回紹介した梵字碑のように、仏教に関わるものも少なからずあります。たとえば国頭村奥間にある金剛山碑(1706年)と南無阿弥陀仏碑(建立年不明)。金剛山は奥間の拝所で、二つの碑は祠に安置されています。金剛山碑を建てたのは首里の天王寺や崇元寺などの住持をつとめた東峰という僧侶です。彼の発案により村人たちが海より小石を集め、石に金剛経を書いて塚を築いた際のものでした。

このような塚は「経塚」と言いますが、沖縄でもっとも有名なのは浦添市経塚の金剛嶺碑でしょう。「経塚」の地名の由来になった石碑

です。16世紀、本土より渡来した真言僧の日秀が、この地に妖怪が出没するところを聞き、金剛経を小石に書いて埋めてこの石碑を建てたところ、それから妖怪が出ることはなくなると伝わっています。



金剛尊經碑[拓本](伊江島 照太寺)
沖縄県立図書館所蔵 CC BY 4.0
(<http://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>)

金剛嶺碑の地中に実際に小石が埋められているのか、実際に調査されたことがないので真相は不明です。しかし近年、首里の当蔵から経塚に埋められているとみられる石と同じタイプのものが大量に見つかっています。この場所は首里の蓮華院跡にあたり、石には経文が一字ずつ墨書されていて、これは「一字一石経」と呼ばれています。こうした小石を地中に埋め、上には石碑を建てて経塚とします。王国時代の記録では円覚寺の住持もつとめた脱心和尚が法華経を石に一字ずつ書写したことが確認され、石碑自体は失われていますが、戦前には蓮華院の一字一石経碑も目録から確認されています。浦添の金剛嶺碑の地中にもおそらくこうした石がたくさん埋められているはずです。

上里 隆史 (うへざと・たかし)

琉球史研究家。内閣府地域活性化伝道師。法政大学沖縄文化研究所研究員。早稲田大学大学院修士課程修了。著書に『琉球という国があった』(福音館書店、2020年)、『海の王国・琉球』(ポニーインク、2018年)、『マンガ沖縄・琉球の歴史』(河出書房新社、2016年)、『尚氏と首里城』(吉川弘文館、2015年)など。NHKドラマ「テンペスト」時代考証や、NHK「プラタモリ」案内人などメディアでも活躍。



と呼ばれる経塚の碑があります。1774年、棟山和尚による建立ですが、ここにも地中に小石に書かれた金剛経が埋められているといわれています。沖縄では仏教が本土ほどなじみがないと考えられていますが、こうした石碑からは、仏教にまつわる歴史の痕跡がいくつも残されていることがわかります。